

部内限り

海上自衛隊二十五周年史

# 海上自衛隊二十五年史







# HP 『海軍砲術学校』 公開資料



海上警備隊總監 海上警備監  
第二幕僚長 警備監 山崎 小五郎  
海上幕僚長 海 将  
(27.4.26~29.8.3)



海上幕僚長 海将 庵原 貢  
(33.8.15~36.8.15)



海上幕僚長 海将 長 沢 浩  
(29.8.3~33.8.15)



海上幕僚長 海将 中山 定 義  
(36.8.15~38.7.1)

# HP 『海軍砲術学校』 公開資料



海上幕僚長 海将 杉江 一三  
(38.7.1~39.8.14)



海上幕僚長 海将 板谷 隆一  
(41.4.30~44.7.1)



海上幕僚長 海将 西村 友晴  
(39.8.14~41.4.30)



海上幕僚長 海将 内田 一臣  
(44.7.1~47.3.16)

# HP 『海軍砲術学校』 公開資料



海上幕僚長 海将 石田 捨雄

(47.3.16~48.12.1)



海上幕僚長 海将 中村 悌次

(51.3.16~52.9.1)



海上幕僚長 海将 鮫島 博一

(48.12.1~51.3.16)



海上幕僚長 海将 大賀 良平

(52.9.1~ )



## 発刊のことば



海上自衛隊は、昭和27年4月26日、海上警備隊として発足以来、厳しい環境のなかを着実な発展を遂げ、早くも四分の一世紀以上の歳月を経過した。

今回、海上自衛隊創設25周年を記念して、海上自衛隊成長発展の沿革並びに貴重な体験及び教訓等を集録し、次の世代に残すとともに今後海上自衛隊に勤務する者の参考に資するため、100名を超える諸先輩の御協力を得て、「海上自衛隊25年史」を発刊する運びとなった。

顧みれば、昭和20年に日本海軍が姿を消して以来、わずか7年で海上自衛隊の前身である海上警備隊が発足した。当時の諸外国の反日感情や、敗戦に伴う過去に対する国内の反動的感情を考えると、海上警備隊が全く違った形で誕生する可能性も十分にあった。しかしながら、関係者の国を思う情熱と、四面を海に囲まれた我が国の存立は海上防衛を抜きにしては考えられないとの信念に基づく行動があったからこそ、本書に見るような形で海上警備隊が誕生し、今日の発展を見たわけであり、私は創設に当たられた方々のその業績に対し、畏敬の念を禁じ得ない。

# HP 『海軍砲術学校』公開資料

創設後25年間の道程にも、種々の曲折があった。私は、昭和27年以来、親しく諸先輩の御指導を受け、また、諸先輩の御労苦を目の当たりにした者の一人であるが、海上自衛隊成長発展の過程を何らかの形で次の世代に残したいという願いは誰もが等しく抱いていたことと思う。したがって、今般本書発刊の運びとなったことは、海上自衛隊にとって誠に喜ばしいことであり、本書の果たす役割は極めて大なるものがあると思ふ。

いうまでもなく、万般のことは過去及び現在の成果であり、海上自衛隊の将来を担う者にとって、海上自衛隊の歴史は必修の知識である。さらに今日の世界情勢をみるに、我が国の平和と独立を守る海上自衛隊の任務はますます重く、道なお遠しの感が大である。隊員諸君は、本書を手がかりに更に深く先人の業績を学び、海上自衛隊の将来進むべき道を求めていくよう希望する。

終わりに、本書の発刊に当たり、多大の御指導、御支援を賜った部内外の方々及び諸先輩に対し、衷心より感謝の意を表し、発刊のことばとする。

昭和55年12月

海上幕僚長 海将 矢田次夫

## 発刊に寄せて

元米海軍作戦部長

アーレイ・バーク大将



It is with great admiration for the important achievements of the Japan Maritime Self-Defense Force during the twenty five years since its founding that I send greetings to the officers and men who now man that splendid organization.

The founding of the Japan Maritime Self-Defense Force was made possible by far-seeing men who, dedicated to Japan, devoted themselves to the problem of safeguarding the future of Japan in recognition of the fact that the destiny of a nation bordering the seas is largely determined by the ability of that nation to control those seas. Many of these wise and practical men were officers of the Imperial Japanese Navy, but other equally dedicated and devoted men made incomparable contributions to establishing a sea-going element to protect Japan's interests on the seas.

# HP 『海軍砲術学校』 公開資料

Among the most gratifying experiences I have ever had were the discussions on the essentials of a suitable sea-going protective force with men for whom I had come to have the highest esteem and respect. Men such as Admiral Kichisaburo Nomura, Admiral Zenshiro Hoshina, Admiral Ko Nagasawa, Admiral Sadayoshi Nakayama and Mr. Takeo Okubo.

This was a most difficult period, for great patience and delicacy were necessary to insure that the new maritime organization would be completely acceptable, and at the same time would be a solid foundation on which to build an effective force for the future.

Of all the essential elements required of a Navy, the most important one is the quality of its people. So months were properly spent on deciding who should comprise the original very small officer corps. These few men had to be dedicated, knowledgeable, skillful and experienced leaders with great understanding of the tremendous problems with which their new organization would be faced. These officers were found. It was a great moment when Admiral Ko Nagasawa became the Chief of Staff, Maritime Self-Defense Force and he and his officers began the service in which you so proudly serve.

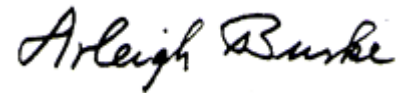
Throughout the years since those days twenty five years ago the worthy successors to Admiral Ko Nagasawa have ably followed in that great man's footsteps and the JMSDF has continuously progressed. Over those years the personnel of the JMSDF have created for themselves and their nation an enviable reputation. They, by their excellent performance of duty, have met the expectations of the creators of the Japan Maritime Self-Defense Force.

Now there are serious and complex issues facing all nations. The future, as always, is unknown. Consequently, the responsibilities of the

# HP 『海軍砲術学校』 公開資料

Japan Maritime Self-Defense Force are increasing. It is reassuring to know that the officers and men of the JMSDF will shoulder those greater duties with the same willing competence as their distinguished predecessors.

Sincerely yours,

A handwritten signature in black ink that reads "Arleigh Burke". The signature is written in a cursive, slightly slanted style.

Arleigh Burke

## 凡 例

1. 本史は、主として海上自衛隊の前身である海上警備隊の創設当時から、昭和52年度末までを記述の対象として。
2. 本史は、おおむね防衛力整備計画の段階により8章に区分し、各章独立方式で記述した。
3. 各章の内外情勢の項については、国際関係は★印、国内情勢は☆印を付した。
4. 資料編（別冊）は、主要年表のほか各項目（防衛・組織編制・人事厚生・教育訓練・予算・装備・施設等）ごとの統計資料並びにその他参考となる資料等を収録した。
5. 用字は、原則として公用文書に関する内閣告示、内閣訓令によったが、特殊な用語については例外があるほか、一部の地名については海図記載のものを使用した。
6. 引用文の用字は、原則として原文のままとした。
7. 年号は、主として日本の年号を用い、錯誤のおそれのない範囲で元号を省略した。
8. 人名は、原則として敬称を省略し、同一人物を二度以上にわたって記述する際は性のみとし、自衛官の場合は当時の階級とした。
9. 計量の単位は、主としてメートル法によった。

## 目 次

正規製本版表紙  
巻頭写真  
歴代海上幕僚長一覧  
発刊のことば  
バーク大将祝辞  
凡 例

### 第1章 海上警備隊の創設まで

(昭和20年8月～27年4月)

#### 第1節 終戦から講話まで

- 1 戦後の内外情勢
- 2 朝鮮戦争のぼっ発と占領政策の転換
- 3 サンフランシスコ講話会議

#### 第2節 沿岸警備力建設の動き／講和条約までの海上治安事情

- 1 海軍の解隊とその残務処理
- 2 戦後の海上治安維持機構
- 3 海上防衛力機構についての研究

#### 第3節 新海上防衛機構建設のつち音／Y委員会の発足とその活動

- 1 新機構創設準備委員会の設置
- 2 新海上防衛機構の創設か海上保安庁の増強か
- 3 米極東海軍との折衝

# HP 『海軍砲術学校』 公開資料

- 第4節 新機構創設案なる／Y機構創設準備の概要
  - 1 要員計画等の立案
  - 2 施設、その他の管理関係諸計画
  - 3 新機構の組織編制案なる
- 第5節 大いなる明日のために／基幹要員教育始まる
  - 1 基幹要員の選抜と教育
  - 2 開拓者精神を発揮した基幹要員

## 第2章 警備隊時代

(昭和27年4月～29年6月)

- 第1節 概説
  - 1 内外情勢
  - 2 部内概史
- 第2節 友愛・良識・精強の名の下に／海上警備隊の発足
  - 1 海上警備隊総監部、横須賀地方監部の誕生
  - 2 初期の海上警備官の募集
  - 3 海上警備隊開庁披露式と音楽隊の活躍
  - 4 制服の制定と変遷
- 第3節 第二幕僚監部・地方隊設置される／保安庁警備隊の発足
  - 1 海上警備隊、保安庁警備隊となる
- 第4節 海上部隊創設される／船隊群の新編
  - 1 貸与船舶の受領始まる
  - 2 船隊群の編成と日本巡航
  - 3 船隊群に対する保安庁長官検閲



# HP 『海軍砲術学校』公開資料

## 第5節 急ピッチで進む要員養成／創設期の教育

- 1 幹部及び士補講習の始まり
- 2 練習隊教育始まる
- 3 創設期の術科教育
- 4 幹部候補生教育始まる

## 第6節 この旗の下に集う／自衛艦旗の制定まで

- 1 警備隊時代の旗章
- 2 海上自衛隊の旗章

## 第7章 羽ばたき始めた海上航空／航空部隊の発足

- 1 航空隊の創設
- 2 航空機の受領始まる
- 3 航空機の分属問題

## 第8節 軌道に乗る特技員の養成／本格的術科教育の開始

- 1 警備隊術科学校の創設
- 2 警備隊時代の術科教育体系

## 第9節 艦艇建造のれい明期／国産艦の建造

- 1 戦後造船界の概況
- 2 国産艦建造の再開
- 3 初期国産艦の基本計画
- 4 初期国産艦の発注とその建造

## 第10節 災害派遣に活躍する警備隊／創設期における災害派遣

- 1 西日本方面水害に対する災害派遣
- 2 和歌山水害に対する救援活動
- 3 根室沖の漁船群遭難に対する救難捜索

## 第3章 海上自衛隊創設時代

(昭和29年7月～33年3月)

### 第1節 概説

- 1 内外情勢
- 2 部内概説

### 第2節 宣誓の声高らかに／海上自衛隊の発足

- 1 自衛隊の発足
- 2 海上自衛隊の発足

### 第3節 海の実力部隊誕生／衛艦隊の発足

- 1 自衛艦隊の編成なる

### 第4節 戦う掃海部隊／第1掃海隊群の新編まで

- 1 戦後の航路啓開業務
- 2 保安庁警備隊以降の航路啓開業務
- 3 イペリット弾等の処理

### 第5節 続々波濤を超えて／回航隊の帰国

- 1 「あさかぜ」「はたかぜ」等の回航
- 2 潜水艦「くろしお」の回航

### 第6節 精強な部隊の錬成を目指して／創設期の部隊訓練

- 1 海上自衛隊演習の開始
- 2 初期の日米共同訓練
- 3 海上自衛隊体育と各種体育大会

### 第7節 天翔ける海の翼／育ち行く海上航空

- 1 航空要員の充足
- 2 P2V-7、UF-2の空輸とS2F-1の受領

# HP 『海軍砲術学校』公開資料

- 3 航空統合教育
- 4 航空部隊の新編進む

## 第8節 国際親善と慣海性のために／遠洋練習航海始まる

- 1 練習隊群の新編と変遷
- 2 遠洋航海実現す
- 3 戦後初めてのハワイ遠航

## 第9節 江田島と市ヶ谷に育つ／幹部教育の新体制

- 1 幹部学校の発足
- 2 幹部候補生学校の発足
- 3 幹部の教育体系

## 第10節 長船首楼艦の誕生／30年代初期国産艦の建造

- 1 量産型国産艦の建造始まる
- 2 30年代初国産艦の基本計画
- 3 「あやなみ」型・「むらさめ」型警備艦の建造
- 4 域外調達艦「あきづき」型の建造
- 5 国産第1号潜水艦「おやしお」の建造

## 第11節 対潜航空勢力の充実／P2Vの国産化

- 1 戦後航空機産業の概況
- 2 P2Vの国産化取極調印される
- 3 国産P2V初号機飛ぶ

## 第12節 補給制度のかなめとして／受給統制隊の発足

- 1 創設期における海上自衛隊の補給制度
- 2 需給統制隊の誕生

## 第13節 海のページェント／観艦式始まる

- 1 自衛隊記念行事の概要
- 2 羽田沖の第1回観艦式

## 第4章 1次防時代

(昭和33年4月～37年3月)

### 第1節 概説

- 1 内外情勢
- 2 部内概史

### 第2節 骨幹的防衛力の建設／第1次防衛力整備計画

- 1 1次防の概要
- 2 1次防と海上自衛隊
- 3 幻のへり母艦 (CVH) 建造計画

### 第3節 躍進する自衛艦隊／自衛艦隊の改編

- 1 新編成と改編の経緯
- 2 自衛艦隊司令部
- 3 護衛艦隊
- 4 航空集団

### 第4節 教育体制の整備進む／海の航空教育

- 1 教育航空集団の新編
- 2 航空学生制度の採用
- 3 受託教育始まる

### 第5節 進展する掃海業務／機動掃海部隊の創設

- 1 第2掃海隊群の新編
- 2 水中処分隊の誕生
- 3 航路啓開業務の進展

### 第6節 総合から分離独立へ／術科学校の増設

- 1 第1術科学校の発足

# HP 『海軍砲術学校』公開資料

- 2 第2術科学校の発足
- 3 第3術科学校の発足

## 第7節 医療機関の整備進む／海上自衛隊の医務衛星

- 1 部内医療機関の開設
- 2 海上自衛隊衛生要員の教育

## 第8節 ミサイル装備艦の建造に着手／1次防艦の建造

- 1 1次防艦の建艦構想
- 2 「いすず」型護衛艦の建造
- 3 国産第1号ミサイル装備艦「あまつかぜ」の建造
- 4 「はやしお」型潜水艦の建造

## 第9節 引き続き大規模災害に行災命発動／災害派遣

- 1 伊豆方面（狩野川）水害
- 2 伊勢湾台風による水害
- 3 三陸方面チリ地震津波

## 第5章 2次防時代

(昭和37年4月～42年3月)

### 第1節 概説

- 1 内外情勢
- 2 部内概史

### 第2節 防衛体制基盤の整備／第2次防衛力整備計画

- 1 2次防の概要
- 2 2次防と海上自衛隊

# HP 『海軍砲術学校』 公開資料

## 第3節 先進海軍に学ぶ／米国派遣訓練

- 1 潜水艦のハワイ派遣訓練
- 2 航空機のハワイ派遣訓練
- 3 「あまつかぜ」の米国派遣訓練

## 第4節 東京オリンピック／富士作戦

- 1 オリンピック東京大会支援
- 2 隊員もオリンピックに参加

## 第5節 活動期に入った海上自衛隊／3自衛隊の統合訓練始まる

- 1 各種協同訓練
- 2 統合演習

## 第6節 整備進む防衛体制／新たな部隊の誕生

- 1 関東地区に第4航空群新編
- 2 第1潜水隊群の新編
- 3 海上訓練指導隊の新編

## 第7節 ユニークな長官直轄部隊の誕生／警務隊及び潜水医学実験隊の新編

- 1 海上自衛隊警務隊の誕生
- 2 海上自衛隊潜水医学実験隊の新編

## 第8節 「ふじ」一路南極へ／南極地域観測支援

- 1 砕氷艦「ふじ」の進水
- 2 昭和基地再開第7次観測隊の支援

## 第9節 システム化の始まった需給統制隊業務／需給統制隊の近代化

- 1 効率的な需給統制を目指して
- 2 需給統制中枢、市ヶ谷地区に集中移転

## 第10節 多用途護衛艦の登場／2次防艦の建造

- 1 2次防艦の基本計画
- 2 多用途護衛艦「たかつき」型の建造

# HP 『海軍砲術学校』公開資料

- 3 初の大型ディーゼル護衛艦「くも」型の建造
- 4 多用途潜水艦「あきしお」型の建造

## 第11節 対潜機近代化への胎動／新機材の国産と開発

- 1 対潜哨戒機の開発検討始まる
- 2 P-2J の国内開発
- 3 PS-1 の研究開発
- 4 HSS-2 の国内生産

## 第12節 大規模災害に機動力発揮／災害派遣

- 1 新潟地震に対する災害派遣
- 2 マリアナ沖の漁船遭難
- 3 全日空ボーイング 727 型旅客機羽田沖に遭難

## 第6章 3次防時代

(昭和42年4月～47年3月)

### 第1節 概説

- 1 内外情勢
- 2 部内概史

### 第2節 効率的な防衛体制の確率／第3次防衛力整備計画

- 1 3次防の概要
- 2 3次防と海上自衛隊

### 第3節 防衛海域広まる／小笠原初頭の日本復帰

- 1 小笠原返還協定調印
- 2 小笠原への部隊配備

# HP 『海軍砲術学校』 公開資料

## 第4節 指揮管理通信の改革／通信の近代化

- 1 通信中継部隊の誕生
- 2 通信システムの近代化
- 3 送受信施設の整備

## 第5節 自衛艦隊に新勢力／第4護衛隊群の新編

- 1 第1海上訓練指導隊の創設
- 2 第4海上訓練指導隊の新編
- 3 4個護衛隊群編成なる

## 第6節 態勢を整える地方隊／地方隊の改編

- 1 地方総監部の改組
- 2 護衛隊の地方隊配備
- 3 後方支援部隊の改編

## 第7節 海洋の実態解明に／海洋観測業務の組織化

- 1 海洋業務隊の新編
- 2 海洋観測艦の建造

## 第8節 新たな要員の育成を求めて／要員教育に新制度

- 1 技術海曹制度
- 2 一般幹部候補生（部内課程）制度
- 3 少年術科学校の創設
- 4 航空士戦術課程制度

## 第9節 「ふじ」の危難／氷海に閉じ込められる

- 1 折れた推進器翼
- 2 「ふじ」の救出作戦

## 第10節 国際親善深まる／花開く遠洋練習航海

- 1 初のヨーロッパ遠洋練習航海
- 2 練習艦「かとり」の就役



# HP 『海軍砲術学校』公開資料

## 3 世界一周遠航遂になる

### 第11節 自衛隊機・民間機接触の余波／自衛隊機の運航を規制

#### 1 F-86F・B-747 雫石上空で接触

### 第12節 隊員の処遇改善進む／変わりゆく隊員施策

#### 1 隊員施策の推進

#### 2 准尉制度の発足

#### 3 予備自衛官の採用

### 第13節 翼を備える護衛艦／3次防艦の建造

#### 1 3次防艦の基本計画

#### 2 対潜主用「ちくご」型護衛艦

#### 3 ヘリコプターとう載艦「はるな」型護衛艦の建造

#### 4 涙滴型潜水艦「うずしお」型の建造

#### 5 ミサイル装備護衛艦「たちかぜ」の建造

### 第14節 作戦機の更新始まる／P-2J・PS-1 就役

#### 1 量産型 P-2J 初号機の領収と部隊配備

#### 2 国産飛行艇1号機の離水と部隊における私見

#### 3 第31航空群の新編とPS-1の部隊配備

## 第7章 4次防時代

(昭和47年4月～52年3月)

### 第1節 概説

#### 1 内外情勢

#### 2 部内概史

# HP 『海軍砲術学校』公開資料

- 第2節 周辺海域防衛能力の強化を目指して／第4次防衛力整備計画
  - 1 4次防の概要
  - 2 4次防と海上自衛隊
  - 3 難航する4次防計画の実施
  
- 第3節 沖縄の日本復帰／自衛隊の部隊配備
  - 1 沖縄の施政権日本に復帰
  - 2 沖縄への通貨海上輸送
  - 3 沖縄への部隊配備
  
- 第4節 防衛体制の整備／部隊の新編及び移転
  - 1 第2潜水隊群の新編
  - 2 航空基地の再編
  - 3 第111航空隊の新編
  
- 第5節 アラブ石油戦略を発動／求められる省エネルギー対策
  - 1 通産省・防衛用石油削減方針を決定
  - 2 省エネルギー対策の実施
  - 3 恒例の観艦式とりやめとなる
  
- 第6節 指揮官戦機能の近代化／SFシステムの開発とプログラム業務の創設
  - 1 SFシステム開発の沿革
  - 2 プログラム業務隊の新編
  
- 第7節 海の男の哀惜を込めて／第10雄洋丸の処分
  - 1 LPGタンカー第10雄洋丸東京湾で衝突炎上
  - 2 海上保安庁からの処分要請と出動準備
  - 3 炎の巨大タンカーついに沈む
  
- 第8節 更に先進海軍に学ぶ／派米訓練に護衛艦も参加
  - 1 護衛艦のハワイ派遣訓練
  - 2 「たちかぜ」の米国派遣訓練

# HP 『海軍砲術学校』公開資料

## 第9節 清新さ加わる要員教育／新教育制度の採用

- 1 一般海曹候補学生制度
- 2 海の婦人自衛官制度
- 3 第4術科学校の創設

## 第10節 我が国の防衛に敬称／ミグ25事件の発生

- 1 ミグ25函館に強行着陸
- 2 津軽周辺の海上警戒

## 第11節 自隊造修能力の整備進む／造修所・航空工作所の改編

- 1 大湊造修所の1万トンドック
- 2 横須賀地区SRFの共同使用と横須賀造修所の改編
- 3 佐世保地区米海軍施設の共同使用と佐世保造修所の改編
- 4 航空機造修能力の向上と航空工作所の改編

## 第12節 国産艦の世代交代始まる／4次防艦の建造

- 1 国産第1世代艦除籍期に入る
- 2 4次防艦の基本計画
- 3 4次防期における代表的護衛艦の建造

## 第13節 小艦艇による救援活動／災害派遣

- 1 水島重油流出事故
- 2 伊豆半島南部の集中豪雨禍
- 3 台風17号による小豆島の水害

## 第8章 新海洋法の幕開けとともに

(昭和52年4月以降)

# HP 『海軍砲術学校』 公開資料

## 第1節 海洋の新秩序時代始まる／内外情勢

- 1 新海洋法の投じた波紋
- 2 日本、領海12海里と200海里漁業専管水域を設定
- 3 南硫黄島の新島観測

## 第2節 基盤的防衛力の整備／昭和52年度以降の防衛力整備計画

- 1 昭和52年度以降の防衛力整備計画作成の経緯
- 2 防衛計画の大綱決定とその背景
- 3 基盤的防衛力構想と海上自衛隊

## 第3節 難航を重ねた対潜機の近代化／次期対潜哨戒機（PX-L）の選定

- 1 PX-L 検討の道程
- 2 PX-L 問題白紙還元
- 3 庁議 P-3C の採用を決定

あとがき

奥付